志木市遺跡調査会調査報告　第9集

西原大塚遺跡第110地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

埼玉県志木市遺跡調査会

はじめに

志木市遺跡調査会
会長　細田信良

志木市は埼玉県の南東部に位置し、都心から25km圏内という距離にあるため、住宅建設を始めとする各種開発行為が非常に多い地になっています。

また、市域を流れる柳瀬川・新河岸川に面した台地縁辺上には、埋蔵文化財包蔵地が少なからず存在しておりますので、これを保護することが文化財保護行政の急務となっています。

包蔵地の一つである西原大塚遺跡は市域最大規模の遺跡ですが、現在、平成18年度の完成を目指して土地区画整理事業が行われており、これに伴い住宅建設が増大しています。

今回、この地に集合住宅建設が計画され、志木市教育委員会では開発当事者と埋蔵文化財の保存について協議を重ねましたが、計画の変更が不可能という結論に達しました。そこで、志木市遺跡調査会が委託を受け発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、約25,000年前の旧石器時代の石器群や約1,700年前の古墳時代前期の住居跡などが発見され、多くの成果を得ることができました。

発掘調査・整理作業及び調査報告書刊行につきましては、開発当事者の清水文雄氏に全面的なご理解を賜り、市教育委員会を始めとする関係各位の皆様からは多くのご協力をいただきました。ここに、心から感謝申し上げる次第です。

最後に、本書が埋蔵文化財の理解と認識を深めるとともに、志木市の歴史を学ぶための一助になれば幸いに存じます。

例　言

1　本書は、埼玉県志木市幸町四丁目に所在する西原大塚遺跡（県No.09-007）第110地点の発掘調査報告書である。

2　本書は、志木市教育委員会の斡旋により、開発主体者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。

3　発掘作業は平成17年２月７日から３月10日まで、整理作業は３月25日から６月28日まで行った。

4　調査地点の地番及び面積は、以下のとおりである。

地番　埼玉県志木市幸町四丁目69街区３～６画地

面積　500㎡

5　発掘調査の担当は、佐々木保俊があたった。

6　本書の作成は志木市遺跡調査会が行い、編集は佐々木保俊があたった。執筆は下記のとおりである。

第１章　佐々木保俊

第２章　第１・２節　佐々木保俊　　第３節　遺構　内野美津江　　遺物　宮川幸佳

第３章　（１）佐々木保俊　　（２）宮川　幸佳

7　本書の挿図版の作成は、調査参加者全員で行った。

8　出土した遺物および記録類は、志木市教育委員会で保管している。

9　調査組織

〈役　員〉　会　長　細田　信良（志木市教育委員会教育長）

副会長　杉山　　勇（志木市教育委員会教育政策部長）（～平成17年３月）

新井　　茂（　　〃　　）（平成17年４月～）

理　事　神山　健吉（志木市文化財保護審議会会長）

井上　國夫（志木市文化財保護審議会委員）

高橋　長次（　　〃　　）

高橋　　豊（　　〃　　）

内田　正子（　　〃　　）

理事兼事務局長

大熊　章只（志木市教育委員会生涯学習課長）

監　事　並木　貴子（生涯学習課主任）（～平成17年３月）

樺嶋　秀俊（　〃　）

古屋　大輔（　〃　）（平成17年４月～）

〈事務局〉　金子　雅佳（生涯学習課主幹）（～平成17年３月）

醍醐　一正（　〃　）（平成17年４月～）

佐々木保俊（生涯学習課主査）

今野　美香（　〃　）

尾形　則敏（生涯学習課主任）

倉部　恵子（　〃　）

高野　雅也（　〃　）（平成17年４月～）

10　発掘調査および整理作業参加者

調査員

内野美津江・深井　恵子

発掘調査および整理作業協力員

朝香　輝郎・阿部　公子・岸田　純一・高杉　朝子・塚田　和枝・十屋　富子・

永井　真理・成田しのぶ・二階堂美知子・松崎　陽子・宮川　幸佳・矢野　恵子

11　発掘調査および出土品整理作業・発掘調査報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏にご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館

埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・㈱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

志木市教育委員会・志木市文化財保護審議会・志木市立郷土資料館

志木市西原特定土地区画整理組合

会田　明・浅野　信英・浅野　晴樹・荒井　幹夫・飯田　充晴・市毛　勲・稲村　繁

井上　尚明・今井　堯・上田　寛・上村　安生・碓井　三子・梅沢太久夫・江原　順

大坪　宣雄・大谷　徹・岡本　東三・織笠　明子・書上　元博・柿沼　幹夫・加藤　秀之

加藤　緑・金子　直行・川崎　志乃・隈本　健介・栗島　義明・栗原　和彦・栗原　文蔵

小出　輝雄・肥沼　正和・小久保　徹・小宮　恒雄・齋藤　欣延・笹森　健一・佐藤　康二

塩野　博・斯波　治・白石　浩之・新名　強・実川　順一・杉本　靖子・鈴木　一郎

鈴木加津子・鈴木　敏弘・鈴木　正博・田代　隆・田中　英司・坪田　幹男・照林　敏郎

中島岐視生・中島　宏・中村　倉司・中山　清隆・並木　隆・根元　靖・野沢　均

野代　幸和・早川　泉・早坂　廣人・原　雅信・廣田吉三郎・福田　聖・堀　善之

松本　富雄・松本　完・三田　光明・矢口　孝悦・柳井　彰宏・柳田　敏司・山村　貴輝

領塚　正浩・若井千佳子・和田　晋治・渡辺　誠

凡　例

1　本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y－弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡　D＝土坑　S＝集石

○遺構・遺物の挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺物写真図版の縮尺は、任意とした。

○遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。また、ピット・掘り込み中の数値は床面若しくは確認面からの深さを、凸堤上の数値は床面からの高さを示し、単位は㎝である。

○遺構挿図版中の遺物出土位置の番号は、遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

2　本書の住居跡の記述の中で使用した主軸とは、炉跡と入口（推定）を結んだ線をいう。

3　遺構の土層説明や土器の記述の中で用いた色彩の表示方法は『新版　標準土色帖　1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修によった。

目　　次

はじめに
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次
表 目 次
図版目次
第１章　発掘調査の概要 …… 1
（１）調査に至る経過 …… 1
（２）遺跡の位置と環境 …… 2
（３）発掘調査の経過 …… 3
第２章　検出された遺構と遺物 …… 5
第１節　旧石器時代の遺構と遺物 …… 5
第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 16
第３節　弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺構と遺物 …… 17
第３章　概括 …… 35
（１）旧石器時代 …… 35
（２）弥生時代後期～古墳時代前期の土器 …… 35
引用・参考文献 …… 37
報告書抄録 …… 38

挿 図 目 次

第１図　市域の地形と遺跡分布（１/20000）
第２図　周辺の地形と調査地点（１/5000） …… 1
第３図　遺構分布図（１/300） …… 3
第４図　13号石器集中地点（１/60） …… 5
第５図　13号石器集中地点出土遺物１（１/１） …… 6
第６図　13号石器集中地点出土遺物２（１/１） …… 7
第７図　14号石器集中地点（１/60） …… 11
第８図　14号石器集中地点出土遺物１（１/１） …… 12
第９図　14号石器集中地点出土遺物２（１/１） …… 13
第10図　14号石器集中地点出土遺物３（１/１） …… 14
第11図　495号土坑・24号集石（１/30） …… 16
第12図　495号土坑出土遺物（１/３） …… 16
第13図　33号住居跡（１/60） …… 18

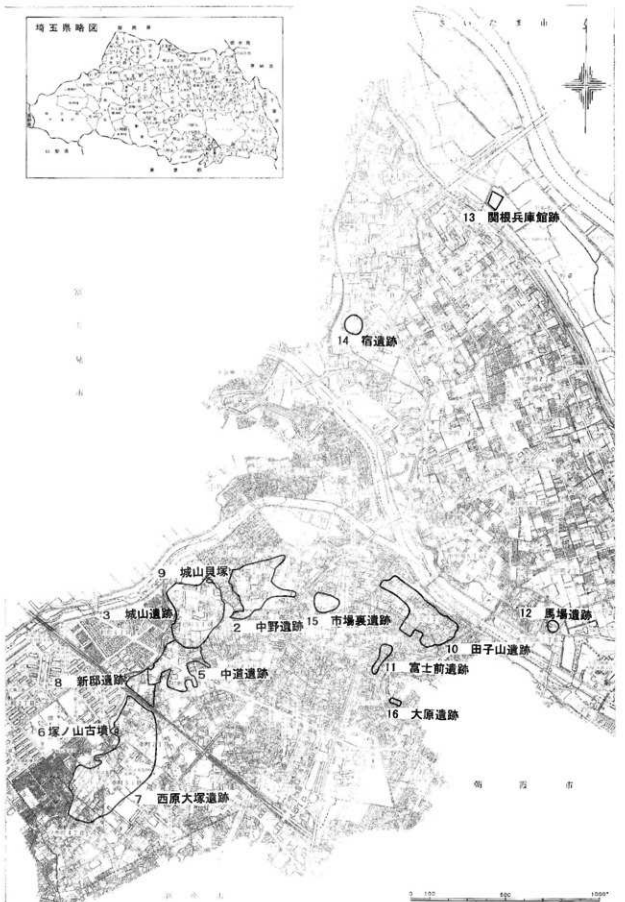
第14図　33号住居跡出土遺物１（１/３）…… 19
第15図　33号住居跡出土遺物２（１/１）…… 19
第16図　515号住居跡（１/60）…… 20
第17図　515号住居跡出土遺物１（１/４）…… 21
第18図　515号住居跡出土遺物２（１/３）…… 21
第19図　517号住居跡（１/60）…… 23
第20図　517号住居跡出土遺物１（１/４）…… 24
第21図　517号住居跡出土遺物２（１/３）…… 25
第22図　518号住居跡（１/60）…… 28
第23図　518号住居跡出土遺物（１/４）…… 28
第24図　519号住居跡（１/60）…… 29
第25図　519号住居跡出土遺物（１/３）…… 29
第26図　520号住居跡（１/60）…… 30
第27図　520号住居跡出土遺物１（１/４）…… 31
第28図　520号住居跡出土遺物２（１/３）…… 31
第29図　521号住居跡（１/60）…… 32
第30図　521号住居跡出土遺物１（１/４）…… 32
第31図　521号住居跡出土遺物２（１/３）…… 33

表　目　次

表１　13号石器集中地点出土石器計測表１…… 9
表２　13号石器集中地点出土石器計測表２…… 10
表３　13号石器集中地点出土礫計測表…… 11
表４　14号石器集中地点出土石器・礫計測表…… 15

図版目次

図版１　調査区近景、発掘調査風景、13号石器集中地点　14号石器集中地点　495号土坑
24号集石　33号住居跡
515号住居跡覆土堆積状態
図版２　515号住居跡遺物出土状態　515号住居跡
517号住居跡遺物出土状態　517号住居跡
518号住居跡　519号住居跡　520号住居跡
521号住居跡
図版３　13号石器集中地点出土遺物　14号石器集中地点出土遺物　495号土坑出土遺物
図版４　33号住居跡出土遺物　515号住居跡出土遺物
図版５　517号住居跡出土遺物
図版６　518号住居跡出土遺物　519号住居跡出土遺物
520号住居跡出土遺物　521号住居跡出土遺物



第1図　市域の地形と遺跡分布（1／20000）

第１章　発掘調査の概要

（１）調査に至る経過

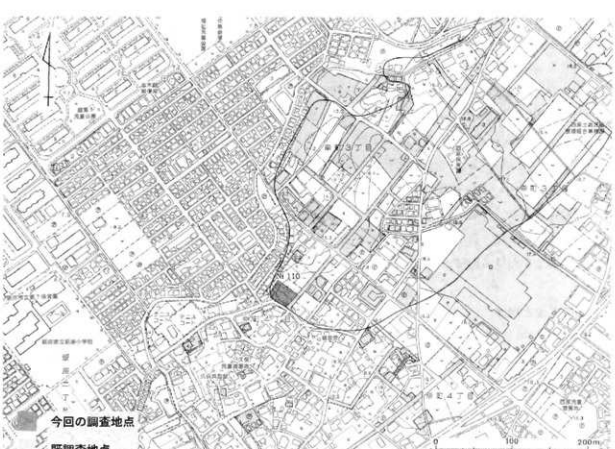
平成16年11月、　個　人　から志木市教育委員会（以下、教育委員会）に志木市幸町四丁目69街区３～６画地内に共同住宅を建設するにあたり、計画地内における埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて照会があった。

教育委員会では、該当地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡内にあるため、当該計画が埋蔵文化財に影響を与える場合には何らかの保存措置を講じなければならないこと。また、そのために埋蔵文化財の有無と取扱いを図るために確認調査を実施する必要がある旨の回答をした。

その後、　個　人　から埋蔵文化財確認調査依頼書が提出されたため教育委員会ではこれを受理し、12月７・８日の両日に確認調査を実施し、共同住宅建設予定部分に弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡と思われる遺構３基を確認した。

この結果に基づき、教育委員会では　個　人　と埋蔵文化財の保存方法について協議したが、建設計画の変更が不可能であるという結論に達し、埋蔵文化財に影響を与える共同住宅建築部分の保存措置として発掘調査による記録保存を実施することに決定した。

その後、　個人から埋蔵文化財発掘届が提出されたため、教育委員会では発掘調査にあたる組織とし



第２図　周辺の地形と調査地点（1／5000）

て志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋、遺跡調査会ではこれを受け平成17年１月11日に埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結、２月７日から発掘調査を開始した。

（２）遺跡の位置と環境

市域の地形の概要

志木市は埼玉県の南東部に位置し、市の南西は朝霞市・新座市と接し、北東は荒川によってさいたま市と、北西は柳瀬川によって富士見市と画される。市の規模は東西4.73㎞・南北4.71㎞・面積9.06㎢を測る。

市域の地形は、市の中央部を南東流する新河岸川によって大略二分され、北東部は荒川（旧入間川）によって形成された低地、南西部は武蔵野台地の野火止台にあたる。より詳しくみると、市の北西部を流れる柳瀬川は流末で90度近く東方に流れを変へ、新河岸川に合流する。

武蔵野台地は古多摩川の扇状地といわれ、標高100ｍを測る青梅市付近を扇頂にして西から東に向けて大きく広がる。志木市の台地部分は、武蔵野台地の北東端部にあたり、北東に向けて緩やかに傾斜し、南西奥部の新座市との境付近で標高約19m、先端で９ｍ前後を測る。また、朝霞市との境には南西方向に小さな谷が入り込むため、市域の台地部分は大きな舌状を呈している。

荒川が形成した低地は、市域では上流部で標高約６ｍ、下流部で約５ｍとあまり比高差はないが、部分的に自然堤防がみられ、僅かな起伏が認められる。

市域の遺跡の概要

市域の埋蔵文化財包蔵地は、主に柳瀬川と新河岸川を臨む台地上の縁辺部に集中する。

柳瀬川流域には上流から、西原大塚遺跡、新邸遺跡（縄文時代前期、古墳時代前期、中・近世）、中道遺跡（旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代、中・近世）、城山遺跡（旧石器時代、縄文時代草創・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世）、中野遺跡（旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代、中・近世）。柳瀬川と新河岸川の合流する付近に市場裏遺跡（弥生時代後期）。新河岸川流域には田子山遺跡（縄文時代草創・中・後・晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、近代）、富士前遺跡（弥生時代後期、古墳時代前期）。また、朝霞市との境にある谷の奥部には大原遺跡（近世）がある。

荒川低地には現在、宿遺跡（近世）、馬場遺跡（古墳時代前期）、関根兵庫館跡（近世）があるが、自然堤防上には未発見の遺跡がある可能性も残されている。

遺跡の立地と環境

西原大塚遺跡は、市の南端に位置する面積約163,000㎡の市域最大規模の集落跡である。

遺跡は柳瀬川を北西に臨む台地上にあり、標高は14～16mで北西方向に徐々に傾斜しているが、概ね平坦である。台地下の柳瀬川に開析された低地は約８ｍを測る。崖下には小規模な湧水地が認められるが、２ヵ所は比較的規模が大きくその部分がえぐれているため崖線は凹凸をなす。

遺跡を載せる台地上には畑地を多く残しているが、現在、土地区画整理事業が進行中であり、それに伴い住宅建設の件数が激増していて、埋蔵文化財に対する影響が危惧されている。

本遺跡の最初の発掘調査は昭和48年に行われ、それ以降、教育委員会・志木市史編さん室・遺跡調査

会が発掘調査を行っていて、旧石器時代、縄文時代早～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の集落遺跡であることが知られてきている。

（3）発掘調査の経過

発掘調査は平成17年2月7日から開始した。バックホーでの表土掘削後、遺構確認作業を行った結果、弥生時代後期～古墳時代前期の所産と思われる7軒の住居跡の他、土坑・集石各1基を検出した。

9日からは33・518・519号住居跡、495号土坑の調査を開始する。33号住居跡は平成1年度に一部調査したものであった。

10日には517号住居跡の調査を開始する。33・519号住居跡の土層図の作成、495号土坑の土層図・平面図・断面図の作成・写真撮影を行う。また、24号集石の調査を行い、平面図の作成と写真撮影を行う。

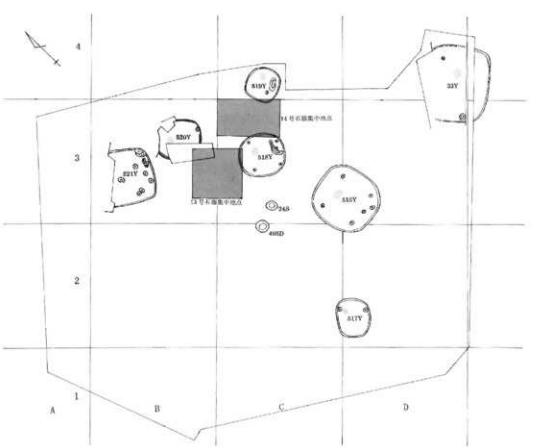
14日には515・520号住居跡の調査を開始する。33・519号住居跡の平面図・断面図の作成とレベリング、517号住居跡の土層図作成を行う。24号集石の礫出土状態の図面作成を続行する。

15日には518号住居跡の土層図の作成、24号集石の図面作成を続ける。

17日には33・518号住居跡の写真撮影、517号住居跡の遺物出土状態の写真撮影・実測を行う。

18日には517・518号住居跡の写真撮影と平面図・断面図の作成、レベリング、520号住居跡の土層図作成を行う。

21日には512号住居跡の調査を開始する。515号住居跡の土層図作成、520号住居跡の写真撮影、平面



第3図　遺構分布図（1／300）

図・断面図作成とレベリングを行う。

22日には515号住居跡の覆土堆積状態及び遺物出土状態の写真撮影を行う。

23日には515号住居跡の平面図作成、512号住居跡の土層図・平面図・断面図の作成及びレベリング、写真撮影を行う。また、520号住居跡の覆土中から旧石器時代のものと思われる黒曜石製の剥片が出土したため、住居跡南側に該期の遺構・遺物確認のためのグリッド（２×２ｍ）を設定し探査した結果、武蔵野台地Ⅳ層及びⅥ層から遺物を検出した。

24日には515号住居跡の写真撮影、平面図・断面図の作成、レベリングを行う。また、Ⅳ層中の遺構・遺物探査のためグリッドを拡張し調査したところ、黒曜石を中心とする小型の剥片などが出土、13号石器集中地点とした。

25・28日には13号石器集中地点の精査を行う。

３月１日には13号石器集中地点の精査を続行する。また、Ⅵ層中の遺構・遺物探査のためにグリッドを拡張し調査を行ったところ遺物を検出、14号石器集中地点とした。

２日には13号石器集中地点の遺物出土状態の写真撮影・実測を行い、遺物の取り上げを始める。14号石器集中地点からの遺物の出土は少ない。

３日には14号石器集中地点の調査区南隅に礫の出土があったため、調査範囲を広げ精査を行う。また、基本土層図を作成し写真撮影を行う。

７日には14号石器集中地点の写真撮影・実測、遺物の取り上げを行い実質的な調査を終了した。なお、埋め戻しは９・10日に行った。

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　旧石器時代の遺構と遺物

13号石器集中地点（第４図）

〔位置〕（B・C－3）G。

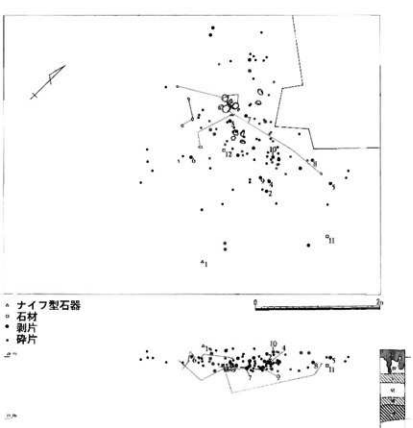
〔構造〕遺物は東西400cm・南北300cmの範囲に分布するが、北側に撹乱が入って破壊されているため、その方向に拡大する可能性が大きい。石器は礫集中部分の東側に分布密度が高い傾向にあることがよみとれ、垂直分布は45cm前後の幅をもちⅢ層からⅣ層にかけて出土するがⅣ層中位から下位にかけて集中する。礫は拳大を超えるものは接して検出され、Ⅳ層下位に認められる。

13号石器集中地点出土遺物（第５・６図）

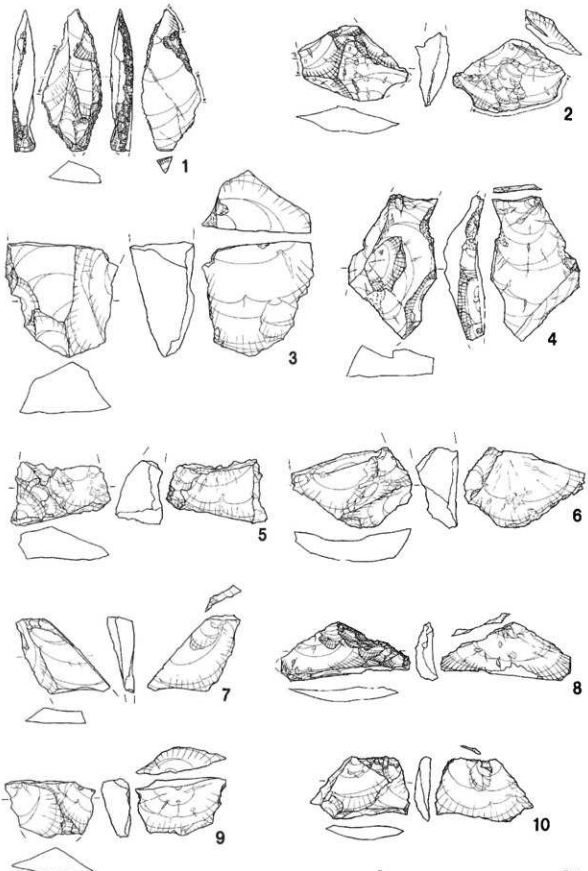
ナイフ形石器１点・石核２点・剥片23点・砕片74点・礫（接合後）13点が出土した。石器の石材としては、黒曜石が92点・安山岩６点・硅岩１点・凝灰岩１点がみられた。礫は被熱していて破損しているものもある。

ナイフ形石器（１）

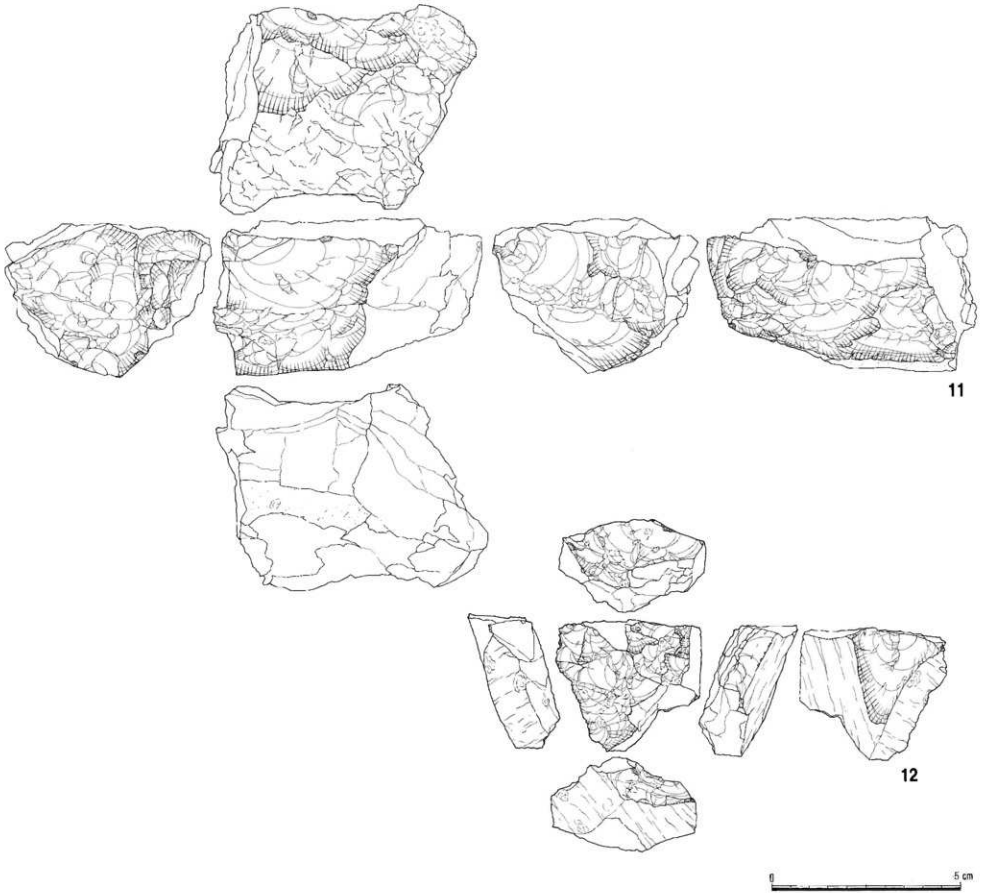
縦長剥片の打面側を石器の先端にする。正面図右側縁は打面の切り取りと刃潰しにより全縁が調整され、左側縁は下位に刃潰し加工が施される二側縁加工のナイフ形石器である。刃部には刃こぼれが認め



第４図　13号石器集中地点（1／60）



第5図　13号石器集中地点出土遺物1（1／1）



第6図　13号石器集中地点出土遺物2（1／1）

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
NJ110U13- 1	ナイフ型石器	黒曜石	3.7	1.6	0.6	2.9	黒A	III層上部	1
2	剥片	黒曜石				1.2	黒B	III層上部	
3	剥片	安山岩				1.1	安A	III層上部	
4	砕片	黒曜石				0.3	黒B	III層下部	
5	剥片	黒曜石	1.7	2.6	1.2	4.5	黒B	IV層上部	5
6	砕片	安山岩				0.6	安A	IV層上部	
7	砕片	黒曜石				0.1	黒B	III層下部	
8	礫						礫計測表		
9	剥片	黒曜石	1.4	3.4	0.4	1.9	黒B	IV層上部	8
10	砕片	安山岩				0.3	安A	IV層下部	
11	剥片	黒曜石				0.4	黒B	III層上部	
12	砕片	黒曜石				0.3	黒B	III層上部	
13	剥片	黒曜石	1.9	3	0.9	2.9	黒B	III層下部	2
14	剥片	黒曜石				6.7	黒B	IV層上部	4
15	剥片	黒曜石	1.5	2.4	0.7	2	黒B	IV層下部	9
16	砕片	黒曜石				0.9	黒B	IV層上部	
17	砕片	黒曜石				0.2	黒B	IV層上部	
18	砕片	黒曜石				0.2	黒B	III層上部	
19	砕片	黒曜石				0.3	黒B	III層上部	
20	砕片	黒曜石				0.1	黒B	III層上部	
21	礫						礫計測表		
22	剥片	黒曜石	2.1	3.2	1.1	4.7	黒B	III層下部	6
23	砕片	黒曜石				0.2	黒B	IV層上部	
24	礫						礫計測表		
25	砕片	黒曜石				0.7	黒B	IV層上部	
26	砕片	黒曜石				0.3	黒B	IV層上部	
27	砕片	黒曜石				0.4	黒A？	III層上部	
28	礫						礫計測表		
29	砕片	黒曜石				0.1	黒D	IV層上部	
30	礫						礫計測表		
31	礫						礫計測表		
32	砕片	黒曜石				0.7	黒B	III層下部	
33	砕片	黒曜石				0.1	黒B	IV層上部	
34	砕片	黒曜石				0.4	黒B	IV層下部	
35	砕片	黒曜石				0.1	黒B	IV層上部	
36	剥片	硅岩				1.6		IV層上部	
37	砕片	黒曜石				0.3	黒B	III層上部	
38	礫						礫計測表		
39	剥片	黒曜石	3	2.9	1.7	12.2	黒B	IV層上部	3
40	砕片	黒曜石				0.5	黒B	IV層下部	
41	砕片	黒曜石				0.3	黒B		
42	砕片	黒曜石				0.3	B	IV層上部	
43	石核	黒曜石	3.5	3.8	1.5	23.9	黒B	IV層下部	12
44	砕片	黒曜石				0.1	黒D	IV層下部	
45	剥片	黒曜石				1	黒C	IV層上部	
46	砕片	黒曜石				0.1	黒B	IV層上部	
47	砕片	黒曜石				0.1	黒B	III層下部	
48	砕片	黒曜石				0.1	黒B	III層上部	
49	剥片	黒曜石				1.6	黒C	IV層上部	
50	砕片	安山岩				0.3	安A	III層下部	
51	砕片	黒曜石				0.1	黒B	III層下部	
52	砕片	黒曜石				0.2	黒C	IV層上部	
53	砕片	黒曜石				0.1	黒B	IV層下部	
54	剥片	黒曜石	2	1.4	0.7	1.5	黒B	IV層下部	7
55	砕片	黒曜石				0.6	黒B	IV層下部	

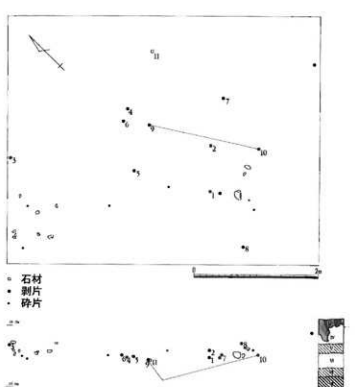
表1　13号石器集中地点石器計測表1

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
56	砕片	黒曜石				0.4	黒B	Ⅳ層下部	
57	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
58	剥片	黒曜石				0.8	黒B	Ⅳ層下部	
59	砕片	黒曜石				0.6	黒B	Ⅳ層下部	
60	砕片	安山岩				0.1	安B	Ⅳ層下部	
61	砕片	黒曜石				0.4	黒B	Ⅳ層上部	
62	砕片	黒曜石				0.3	黒B	Ⅳ層上部	
63	砕片	黒曜石				0.6	黒B	Ⅳ層上部	
64	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
65	剥片	黒曜石	1.6	2.6	0.4	1.1	黒B	Ⅲ層上部	10
66	砕片	黒曜石				0.2	黒B	Ⅲ層上部	
67	砕片	黒曜石				0.2	黒B	Ⅳ層上部	
68	砕片	黒曜石				0.2	黒B	Ⅳ層上部	
69	砕片	黒曜石				0.3	黒B	Ⅲ層下部	
70	砕片	黒曜石				0.3	黒B	Ⅳ層下部	
71	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層上部	
72	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
73	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層上部	
74	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅲ層下部	
75	剥片	黒曜石				1.1	黒B	Ⅳ層上部	
76	砕片	黒曜石				0.2	黒B	Ⅳ層上部	
77	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層上部	
78	砕片	黒曜石				0.2	黒B	Ⅳ層上部	
79	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層上部	
80	剥片	黒曜石				1.2	黒D	Ⅲ層下部	
81	剥片	黒曜石				1.4	黒B	Ⅳ層上部	
82	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層上部	
83	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層上部	
84							欠番		
85	砕片	黒曜石				0.4	黒B	Ⅳ層下部	
86	剥片	黒曜石				1	黒C	Ⅳ層上部	
87	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
88	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
89	砕片	凝灰岩				0.6		Ⅳ層下部	
90	砕片	黒曜石				0.3	黒B	Ⅳ層上部	
91	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
92	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層上部	
93	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
94	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
95	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
96	砕片	安山岩				0.1	安A	Ⅳ層下部	
97	欠						欠計測表		
98	砕片	黒曜石				0.5	黒B	Ⅳ層下部	
99	剥片	黒曜石				0.9	黒B	Ⅳ層下部	
100	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
101	砕片	黒曜石				0.3	黒B	Ⅳ層下部	
102	砕片	黒曜石				0.2	黒B	Ⅳ層上部	
103	砕片	黒曜石				0.4	黒B	Ⅳ層下部	
104	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
105	砕片	黒曜石				0.1	黒D	Ⅳ層上部	
106	砕片	黒曜石				0.1	黒B	Ⅳ層下部	
107	剥片	安山岩				0.9	安B	Ⅳ層下部	
108	石核	黒曜石				150	黒B	Ⅳ層下部	11
109							欠番		
110	剥片	黒曜石				1	黒B	Ⅳ層下部	

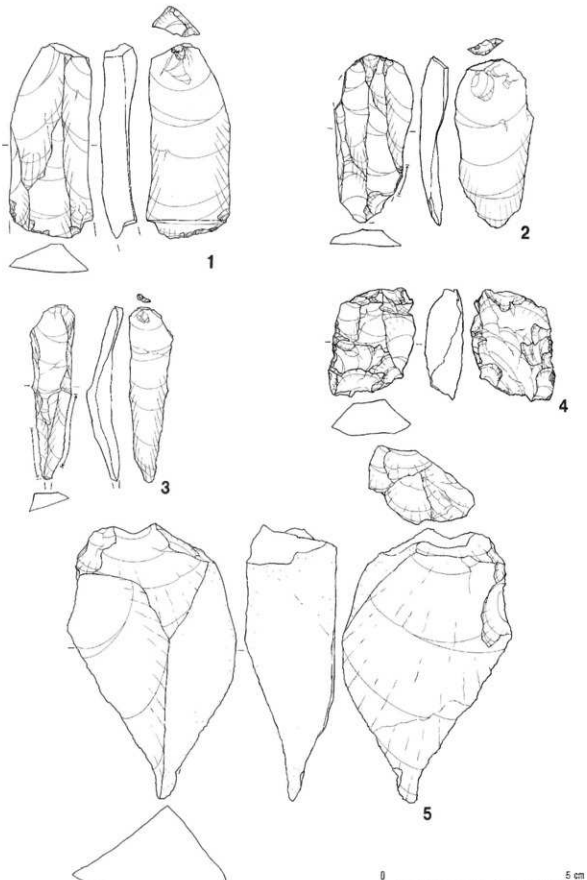
表2　13号石器集中地点石器計測表2

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・備考	出土層位	図版番号
N1110U13-①	礫	砂岩	5.8	6.8	2.2	110	赤化・破損	IV層下部	
②	礫	砂岩	4.6	10.1	2.2	120	赤化・破損	IV層上部	
③	礫	砂岩	6.4	9.6	3.5	240	⑤と接合・赤化	IV層上部	
④	礫	砂岩	6.4	9.6	3.5	90	③と接合・赤化	IV層下部	
⑤	礫	砂岩	10.2	17.3	6.5	1290	8と接合・赤化	IV層下部	
⑥	礫	硅岩	4.5	17.3	4.8	270	赤化	IV層上部	
⑦	礫	砂岩	9.8	10.5	9.7	660	⑫と28と接合・赤化	IV層下部	
⑧	礫	砂岩	5.5	9.2	3.7	260	赤化	IV層上部	
⑨	礫	砂岩	9.8	10.5	9.7	840	⑦と28と接合・赤化	IV層下部	
⑩	礫	砂岩	1.7	3.1	1.3	6.7	赤化・破損	IV層下部	
⑪	礫	砂岩	4.9	7.2	4.5	260	赤化	IV層下部	
⑫	礫	砂岩	6.1	7.9	3.6	250	赤化	IV層上部	
8	礫	砂岩	10.2	17.3	6.5	30.3	⑤と接合・赤化	IV層上部	
21	礫	硅岩	3.8	5.7	2.5	51.4	38と接合・赤化	IV層上部	
24	礫	硅岩	2.8	1.7	0.7	4.5	赤化・破損	IV層上部	
28	礫	砂岩	9.8	10.5	9.7	30.1	⑦と⑨と接合・赤化	IV層上部	
30	礫	硅岩	4.7	5.8	2.6	19.3	31と97と接合・赤化	IV層上部	
31	礫	硅岩	4.7	5.9	2.6	18.1	30と97と接合・赤化	III層下部	
38	礫	硅岩	3.8	5.7	2.5	8.2	21と接合	IV層上部	
97	礫	硅岩	4.7	5.8	2.6	53.4	30と31と接合・赤化	IV層下部	

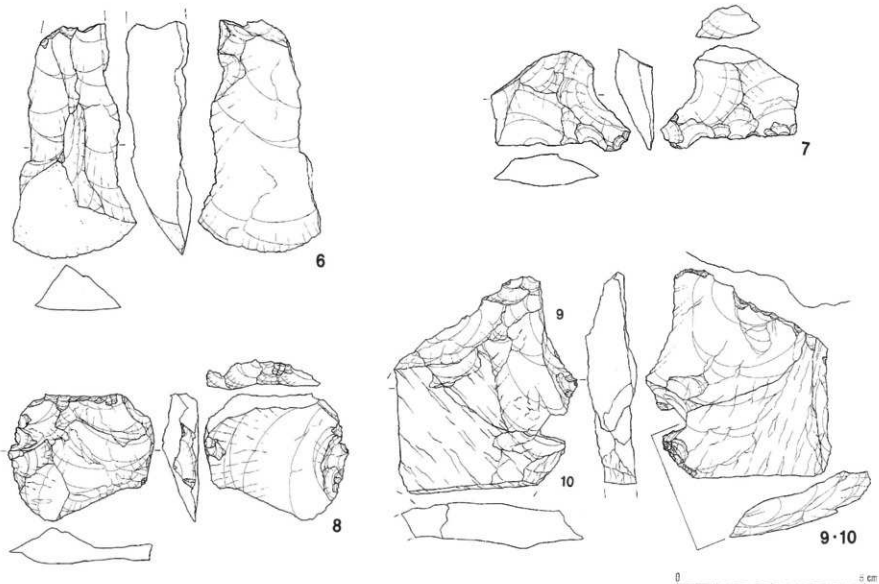
表3　13号石器集中地点礫計測表（接合資料は接合後の計測値）



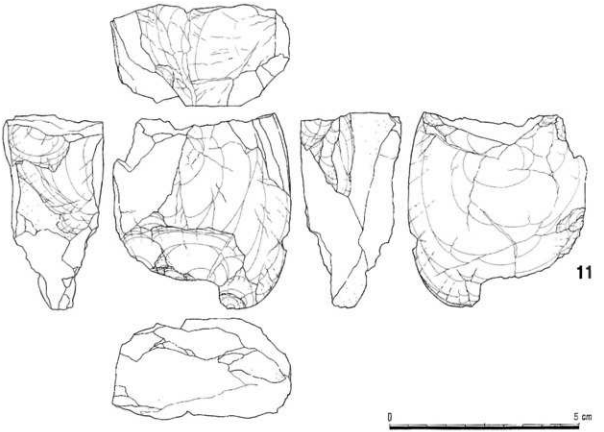
第7図　14号石器集中地点（1／60）



第8図　14号石器集中地点出土遺物1（1／1）



第9図　14号石器集中地点出土遺物2（1／1）



第10図　14号石器集中地点出土遺物３（1／1）

られる。透明度の比較的高い黒曜石製。

石核（11・12）

ともに不純物を多く含む漆黒の黒曜石製で同母岩である。12は11からの剥片を利用したものであろうか。幅広・寸づまりの剥片が剥取されている。

11は三角柱状のそれぞれの面を打面として剥離を行っている。

12は平坦な打面から剥離を行っている。剥取された剥片は不定形なものであったようだ。

剥片（２～10）

縦長（３・４）の剥片もあるが、大部分は幅広ないしは寸づまりで不定形の小型のものである。２は使用痕のある剥片。正面図右側縁から先端にかけて微細な刃こぼれが認められる。すべて不純物を含む漆黒の黒曜石製で、石核と同母岩の可能性が大きい。

14号石器集中地点（第７図）

〔位置〕（Ｃ－３）Ｇ。

〔構造〕遺物は東西550㎝・南北350㎝の範囲に散漫な状態で分布する。垂直分布は40㎝前後の幅をもち、Ⅴ層からⅥ層上半にかけて遺物の出土がみられるが、Ⅵ層上位に集中する傾向がある。

14号石器集中地点出土遺物（第８～10図）

石核１点・剥片12点・砕片５点・礫13点が出土した。石器の石材としては黒曜石７点・安山岩４点・硅岩５点・頁岩１点・黒色頁岩１点からなる。礫は被熱しているものが多い。

注記番号	石器形式	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	接合・同母・備考	出土層位	図版番号
Ni110U14- 1	砕片	黒曜石				0.1	黒B	VI層上部	
2	砕片	黒曜石				0.1	黒B	VI層上部	
3	砕片	安山岩				0.3	安A	V層下部	
4	剥片	安山岩	6	3.3	1.6	25.1	安A	VI層上部	6
5	剥片	硅岩	2.8	2.1	1	5.8	珪A	VI層上部	4
6	剥片	硅岩				18.4	硅B、10と接合	VI層下部	9
7	剥片	黒曜石	4.5	1.2	0.7	4.7	黒B	V層下部	2
8	剥片	硅岩	3.3	3.8	1	10.3	硅A	V層上部	8
9	砕片	黒曜石				0.3	黒B	V層下部	
10	剥片	安山岩	2.4	3.6	1	6.9	安A	VI層上部	7
11	礫	フォルンフェルス				6.1	破損	VI層上部	
12	剥片	硅岩				1.5	硅B、9と接合	VI層上部	10
13	石核	頁岩	5	4.6	2.6	65.1		VI層下部	11
14	剥片	黒曜石	4.6	1	0.6	2.3	黒B	V層上部	3
15	礫	砂岩				60.6		V層下部	
16	礫	砂岩				78.6	赤化	VI層下部	
17	礫	砂岩				47.9	赤化	V層下部	
18	礫	硅岩				70		V層下部	
19	礫	砂岩				200	赤化	V層下部	
20	礫	砂岩				180		VI層上部	
21	礫	硅岩				13.5		V層上部	
22	剥片	黒色頁岩	7.3	4.5	2.3	50		VI層上部	5
23	礫	砂岩				1470		VI層上部	
24	礫	砂岩				120	赤化	VI層上部	
25	礫	砂岩				16.5	破損	V層下部	
26	剥片	安山岩				10.7	安A	III層下部	
27	剥片	黒曜石	5.2	2.1	0.8	9.5	黒A	VI層上部	1
28	礫	砂岩				140		VI層上部	
29	砕片	黒曜石				0.1	黒B	VI層下部	
30	礫	砂岩				100	赤化	V層上部	
31	剥片	硅岩				3.5	硅A	VI層上部	

表4　14号石器集中地点石器・礫計測値

石核（11）

一部に礫面を残す分厚い剥片を使用。作業面と打面を入れ替えるような剥片剥離を行っている。頁岩製。

二次加工のある剥片（4・8）

4は幅広の剥片で、正面図左側縁に調整が加えられる。8は縦長の剥片で、正面図上側縁に調整が加えられる。ともに硅岩製。

剥片（1～3・5～7・9・10）

1～3は石刃状の縦長剥片。2・3は使用痕のある剥片で、部分的に微細な刃こぼれが認められる。1は漆黒の黒曜石。2・3は透明感のある黒曜石。

5・6は縦長、7は不定形の剥片である。9・10は幅広の剥片が接合したもの。5は黒色頁岩、6・7は安山岩で同母岩、9・10は硅岩である。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

495号土坑（第11図）

〔位置〕（C－２）G。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）105×95cm・深さ20cm前後を測り、断面形は椀状を呈する。（長軸方位）N－40°－W。

〔覆土〕堆積状態が不整合で、埋め戻された可能性がある。

１層　耕作土。

２層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。黒色粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

３層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロック。硬質。

４層　褐色土（10YR4/4）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質、粘性あり。

〔遺物〕覆土中から土器小片３点が出土した。図示できた遺物は１点のみである。

〔時期〕縄文時代中期。

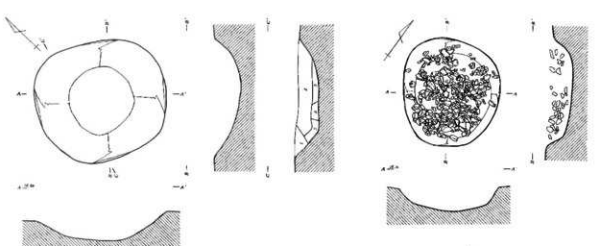
495号土坑出土遺物（第12図）

竹管状施文具による押し引き文を３条巡らせ、以下、押し引き文をやや斜位に多状に施す。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈し、胎土中には細礫を僅かに含む。

24号集石（第11図）

〔位置〕（C－３）G。

〔構造〕（平面形）不整長方形。（規模）88×78cm・深さ20cm前後で断面形が椀状の掘り込みをもつ。（長軸方位）N－35°－W。（礫）さほど焼けた痕跡はなく、坑内にむらなく充満する。



第11図　495号土坑・24号集石（1／30）

第12図　495号土坑出土遺物（1／3）

〔覆土〕黒色土（7.5YR2/2）。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
〔遺物〕土器などの遺物の出土はなかった。
〔時期〕縄文時代か。

第3節　弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺構と遺物

33号住居跡（第13図）

〔位置〕（D－4）G。
〔構造〕平成1年度に一部調査。北側は根切り溝により破壊されている。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×625cm。（主軸方位）N－40°－E。（壁高）5～40cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（床面）北東側に硬化面が認められた。（炉跡）住居中央から北東に偏って位置する。65×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cm程度の掘り込みをもつ。炉床の赤化も僅かで短期間の使用が考えられる。（柱穴）主柱穴は4本になると思われ、北コーナーに1本検出された。他は攪乱中か。（貯蔵穴）南コーナーに位置する。径45cmの略円形を呈し、深さ27cmを測る。
〔覆土〕堆積状態が不整合で、埋め戻された可能性がある。北コーナー部に小砂利を含む暗赤褐色土が堆積する。

1層　耕作土
2層　明褐色土。ローム粒子を含む
3層　明褐色土。ローム粒子・黒色粒子を含む
4層　黒色土。ローム粒子を僅かに含む
5層　明褐色土。ローム粒子を含む
6層　明褐色土。ローム粒子を含む
7層　黒色土。ローム粒子を僅かに含む
8層　暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む
9層　暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む
10層　暗赤褐色土。小砂利を含む。
11層　明褐色土。ローム粒子を多く含む

〔遺物〕住居北東側から僅かに出土した。
〔時期〕弥生時代後期後半～古墳時代前期前半。

33号住居跡出土遺物（第14・15図）

壺形土器（1～5）

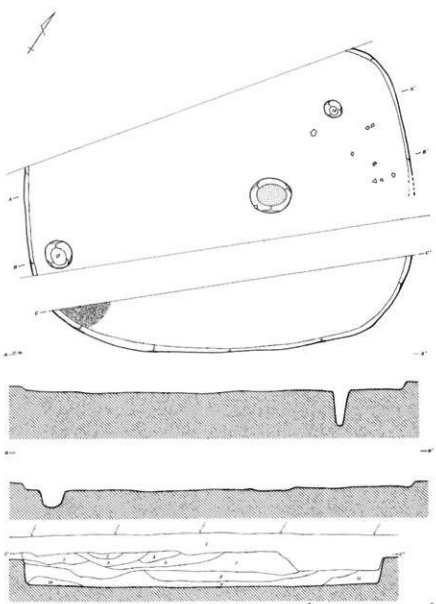
1は頸部破片。外面は縦方向、内面は横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕がみられる。外面頸部下端には円形浮文が施される。内外面共に赤彩される。色調は橙色（5YR7/6）、赤彩部が赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子・輝石を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土である。

2は肩部破片。外面には乙字状結節文で区画された、LRの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ、赤彩される。内面は剥離が激しく不明瞭。色調は橙色（5YR6/6）、赤彩部は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子・輝石を含む。覆土中から出土した。

3・4は頸部から肩部にかけての破片。3は肩部外面にLR単節の端末結節縄文が施され、上端には円形浮文の痕が残る。内面はヘラナデされるが、輪積痕が明瞭に残る。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子・輝石を含む。4は外面にLR単節の端末結節縄文が2段に施され、1段目の縄文帯の中には円形浮文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面は剥離が激しい。色調は橙色（5YR6/6）、赤彩部はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。胎土には粗砂・橙色粒子・輝石・角閃石を含む。いずれも覆土中より出土した。

5は広口壺の口縁部破片か。口唇部はヨコナデ、内外面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。内面には黒斑がみられる。色調は橙色（7.5YR6/6）、黒斑部は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には粗砂・赤褐色粒子を含む。覆土中より出土した。

6は頸部破片。頸部で屈曲して、口縁部は外反する器形と推測される。外面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。内面はヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈



第13図　33号住居跡（1／60）

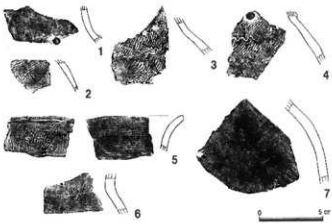
する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土である。

甕形土器（7）

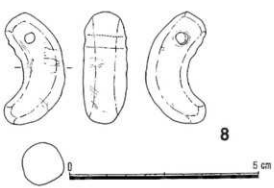
台付甕形土器の甕部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。外面には煤が付着する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

土製勾玉（8）

完形で小ぶりである。最大長3㎝・最大幅1.6㎝・最大径1.1㎝、穴径は0.3㎝を測る。重量は4.6g。手づくねで作られており、表面は丁寧にナデられている。尾部に比べて頭部がやや厚めに作られている。穿孔は一方向から行われている。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第14図　33号住居跡出土遺物1（1／3）



第15図　33号住居跡出土遺物2（1／1）

515号住居跡（第16図）

〔位置〕（D－3）G。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）520×478㎝。（主軸方位）N－12°—W。（壁高）27～41㎝を測り、70°前後の角度で立ち上がる。（床面）壁際及び炉の周辺を除いて硬化面が認められた。また、貯蔵穴の周辺は被熱のため赤化している。（炉跡）住居中央から北に偏って位置する。60×55㎝の不整形を呈する粘土火皿で、粘土の厚さ8㎝前後を測る。（柱穴）各コーナー部の4本が主柱穴になろう。南壁下の1本は住居内側に傾斜をもって穿たれていて、梯子穴を想定させる。（貯蔵穴）南壁下中央から東に偏って位置する。径42㎝の円形を呈し、深さ24㎝を測る。

〔覆土〕3層以下は不整合な堆積状態で埋め戻された感が大である。南東コーナー部に小砂利を含む暗赤褐色土が堆積する。

1層　耕作土。

2層　黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

3層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。

5層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

6層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。やや硬質。

7層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

8層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材小片を多く含む。焼土粒子

を含む。やや軟質。

9層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を含む。やや硬質。

10層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

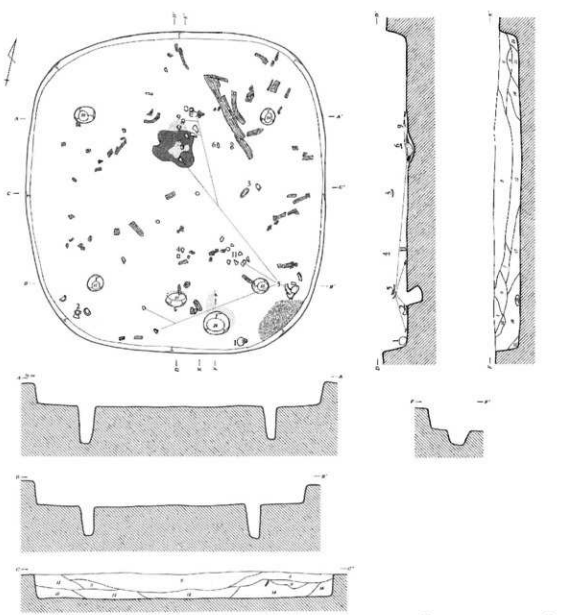
11層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

12層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材片を多く含む。焼土粒子を含む。やや軟質。

13層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材片・焼土粒子を含む。やや軟質。

14層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む。やや軟質。

15層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。やや硬質。



第16図　515号住居跡（1／60）

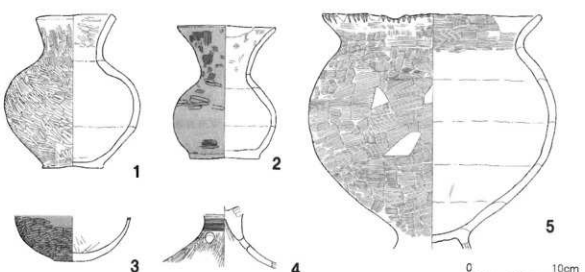
16層　黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
17層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化材片・焼土粒子を含む。やや軟質。
18層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや軟質。
19層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材片を含む。やや軟質。
20層　暗赤褐色土（5YR3/2）。焼土ブロック。やや軟質。
21層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化材片を含む。やや軟質。
22層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
23層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕多量の土器片を検出するが、大部分が覆土中の出土である。また、炭化材の出土が目立つ。
〔時期〕古墳時代前期。
〔所見〕覆土中及び床面上に焼土・炭化材が検出され、焼失家屋の可能性がある。

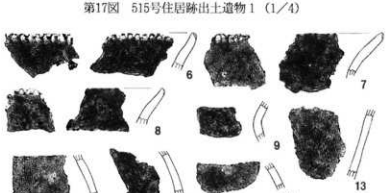
515号住居跡出土遺物（第17・18図）

壺形土器（1～3）

1は体部上半に最大径を持つ単口縁の小形土器で完形。口径8.5cm・底径6.5cm・器高11.5cmを測る。中心が僅かに窪んだ底部から立ち上がり、肩部が張りだす球形の体部を作出する。頸部は強くくびれて、



第17図　515号住居跡出土遺物1（1／4）



第18図　515号住居跡出土遺物2（1／3）

短い口縁部は直線的に外傾しながら立ちあがる器形である。口唇部は粗く面取りされる。口唇部内外面はヨコナデ。外面はヘラミガキされるが、口縁部と体部下半にハケ目痕が残る。内面口縁部は横方向に粗くヘラミガキされる。以下ヘラナデされるが、斑点状の剥離が顕著で不明瞭。底部は粗くヘラケズリされるが工具痕が残る。体部上半と口縁部には黒斑がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）、黒斑部は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。胎土には礫・粗砂・軽石と思われる白色粒子を含む。東南壁際付近床面上からの出土。

2は体部中位に最大径を持つ単口縁の小形土器で完形。口径10.4cm・底径7.3cm・器高14.3cmを測る。中心が僅かにくぼんだ平底から立ち上がり、扁球状の体部を作出する。頸部は強くくびれて直立気味に立ち上がり、口縁部は外反しつつ長く伸びる。外面と口縁部内面はヘラミガキされるが、器面の荒れが激しく不明瞭。内面体部はヘラナデされるが工具痕が残る。外面と内面口縁部には赤彩痕が残る。底部はヘラナデされる。色調は浅黄橙色（7.5YR8/6）、赤彩部は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。西コーナー壁際床面上より出土。

3は体部下半以下が残存する。現存高6.5cm。丸みを帯びた小さな底部から立ち上がり球形を呈すると推測される体部へと至る。外面は横方向に丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるが底部付近に工具痕が残る。底部外面は粗くヘラケズリされる。体部外面は赤彩される。外面底部から体部下半にかけて円形の黒斑がみられる。色調は赤彩部が赤褐色（5YR4/6）、黒斑部が黒褐色（5YR3/1）、内面は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土である。

高坏形土器（4）

坏底部以下が残存するが、脚裾部は欠損する。裾部へかけて末広がりに広がる器形である。脚部中位には3箇所に、外側から内側へ直径1.2cmの円窓が確認される。坏部内面はヘラミガキされる。脚部外面上部には14本の横線文が施され、以下縦方向に丁寧にヘラミガキが施される。脚部内面はヘラナデされるが器面の荒れが激しく不明瞭。天井部付近には絞り目がみられる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子・白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中より出土した。

甕形土器（5～13）

5は台付甕形土器の甕部のみ残存。口径23cm・現存高25cmを測る。最大径を中位よりやや上部に持つ球状の体部である。頸部は強くくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には、柾目の板の小口部分を使用して面取りされた後刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と内面口縁部にはハケ目痕が残る。体部外面上半と内面下位には、炭化物の付着がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）、脚台部内面のみ橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・輝石を含む。南壁際付近や炉付近の床面上、床面から5cm浮いた状態の覆土中からのものが接合した。住居廃絶後に、埋め戻された土と共に廃棄されたと思われる出土状態である。

6～8は同一個体と思われる口縁部破片。口唇部内外面ともに柾目の板の小口部分を使用して面取りされている。外面口唇部には同様の工具で左方向から押捺した刻みが巡る。内外面ヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色細粒子・2～3㎜の橙色粒子を含む。6は炉付近の床面から9cm浮いた状態で出土した。7・8は覆土中からの出土。

9は6～8と同一個体と思われる頸部破片。頸部で強くくびれて口縁部は外反する器形と推測される。

炉内部から出土した。

10～12は肩部破片である。10は内外面ヘラナデされるが、外面には不規則なハケ目痕が残る。内面には輪積み痕がみられる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には粗砂・1～2㎜の橙色粒子を含む。11・12は同一個体か。共に内外面ヘラナデされるが、外面には斜位のハケ目痕が残る。外面には炭化物が付着する。色調は内面が橙色（7.5YR7/6）、外面は褐灰色（7.5YR3/1）を呈する。胎土には粗砂・白色細粒子・輝石を含む。11は住居跡中央南寄り、床面から2㎝浮いた状態の出土であるが、12は覆土中の出土。

13は甕部下半の破片。内外面はヘラナデされるが、外面には不規則なハケ目痕が残る。内面には工具痕が残る。色調は外面が灰褐色（7.5YR5/2）、内面はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には粗砂・1～2㎜の橙色粒子を含む。覆土中から出土した。

517号住居跡（第19図）

〔位置〕（D－2）。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）320×220㎝。（主軸方位）N－40°－E。（壁高）24～45㎝を測り、70°前後の角度で立ち上がる。（床面）住居中央から東側にかけて硬化面が検出された。（炉跡）北コーナー部に近い部分に位置する。46×43㎝の楕円形を呈する地床炉で、深さ6㎝の掘り込みをもつ。（柱穴）炉跡に隣接してピットが1本検出されたが、柱穴とするのには疑問が残る。（貯蔵穴）南東コーナー部に位置する。45×40㎝の略楕円形を呈し、深さ20㎝を測る。

〔覆土〕

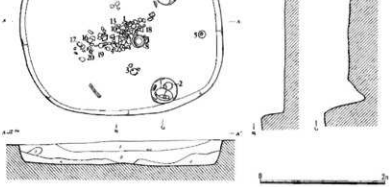
1層　黒色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

2層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。やや軟質。

3層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。

4層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕壁際近くの4点（2・5・7・9）は床面上の出土。住居中央部から出土した一群の遺物は、



第19図　517号住居跡（1／60）

2層上部の出土で、廃棄されたような状態であった。床面上に炭化材が検出された。

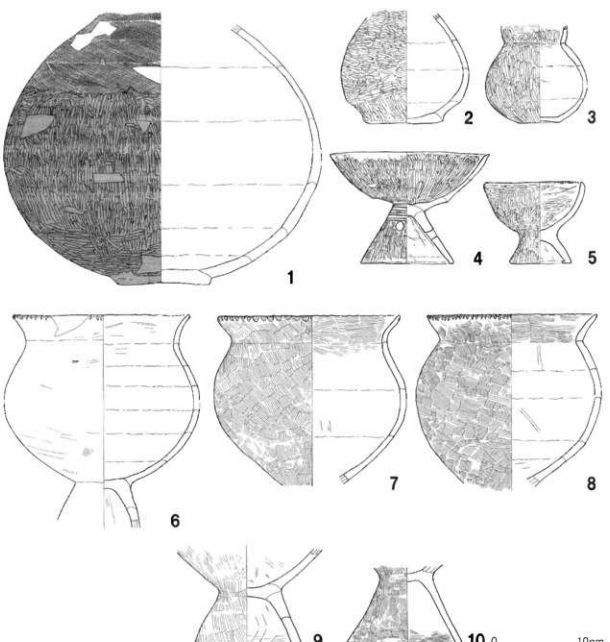
〔時期〕古墳時代前期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子・炭化物粒子を含み、床面上に炭化材があるなど、焼失家屋の可能性がある。

517号住居跡出土遺物（第20・21図）

壺形土器（1～3・11～12・16）

1は口頸部を欠損する。底径9.5cm・体部最大径33.5cm・現存高29cmを測る大形の土器。突出して明瞭に作出された底部は、やや上げ底気味である。最大径を中位にもつ体部は、張りの強い球状を呈する。肩部には4段の網目状撚糸文が施される。外面は文様帯以外は縦方向にヘラミガキされるが、僅かにハケ目痕が残る。体部は文様帯以外は赤彩されるが、文様帯の内部にも僅かに赤彩痕がみられる。内面は



第20図　517号住居跡出土遺物1（1／4）

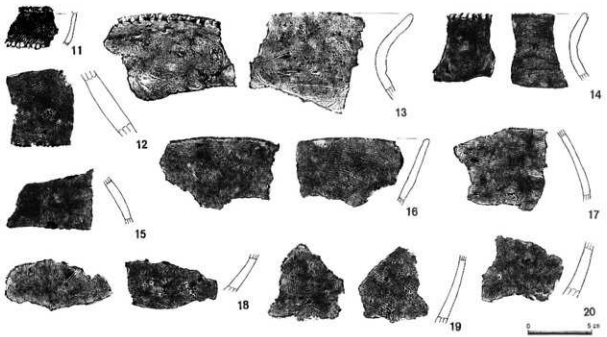
丁寧にヘラナデされるが、体部下位に工具痕が残る。底部外面は粗くヘラケズりされる。体部外面下位には焼成時についたと思われる、長さ12cm・幅10cm程度の黒斑がみられる。色調は橙色（7.5Y7/6）、赤彩部はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子・白色粒子を含む。住居ほぼ中央、床面から15cm浮いた状態で出土した。

2は小形で口頸部を欠損する。底径8.4cm・現存高12cmを測る。平底で突出した底部から、肩の張らない下膨れの体部を形成する。体部下半には一度乾燥させてから作られたと思われる僅かな稜が見られる。体部外面は横方向にヘラミガキされるが、体部下半の稜以下は縦方向にヘラミガキされる。体部中位には消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされるが、剥離が激しく不明瞭。底部は粗くヘラミガキされる。色調は外面がにぶい赤褐色（5YR4/4）、内面はにぶい橙色（5YR6/4）、黒斑部は黒褐色（5YR3/1）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。貯蔵穴覆土上、床面レベルの位置から出土した。

3はいわゆる甕壺であろうか。口縁部を欠く小形の土器で、底径4.2cm・現存高10.5cmを測る。窪んだ底部から体部中位に最大径をもつ球形の体部へ至り、頸部で屈曲する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部で僅かに外反する器形であることが推測される。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされるが、僅かにハケ目痕が残る。内面口縁部は縦方向にヘラミガキされるが、斑点状の剥離が激しく不明瞭である。色調は外面が橙色（2.5YR6/6）、内面は橙色（5YR7/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが精製されきめ細かく堅緻である。住居ほぼ中央、床面から25cm浮いた状態で出土した。

11は複合口縁部破片である。口唇端部にはLRの単節縄文が施される。口縁部外面には、口唇端部と同じ原体による羽状縄文が施される。複合口縁部下端には柾目の板の小口部分の刺突による刻みが施される。内面はヘラミガキされ、赤彩される。色調は外面が浅黄橙色（7.5YR8/6）、内面赤彩部は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

12は肩部破片。外面にはLRの単節縄文が羽状に施される。羽状縄文帯の上下には2条のS字状結節



第21図　517号住居跡出土遺物2（1／3）

文が施される。内面は横方向にヘラナデされる。色調は外面がにぶい赤褐色（5YR5/4）、内面はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

16は単口縁壺の口縁部破片。口縁部が内湾気味に立ち上がる器形である。口唇部内外面はヨコナデ。口唇端部は面取りされる。口縁部内外面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。住居ほぼ中央、床面から15cm浮いた状態で出土。

高坏形土器（4・5）

4は完形。口径16.8cm・器高11.8cm・裾径10.8cmを測る。有稜の坏部は僅かに内湾気味ではあるが、ほぼ直線的に広がる器形である。口唇部内面は面取りされている。脚台部は裾部へかけて直線的に広がる器形である。脚部中位には、外側から3個所穿孔されており、内面には粘土が剥がれ落ちたままになっている。脚台部上半には沈線状に施された6本の横線文が巡る。坏部内外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。脚部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。脚部内面は横方向にヘラナデされるが工具痕が残る。裾端部内外面はヨコナデされる。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。住居ほぼ中央、床面から6cm浮いた状態で出土。

5は口径10.7cm・器高8.8cm・底径6.5cmと小形で完形。脚部に比べて坏部が大きく塊形で、台付鉢に近い器形である。坏部は丸くて深い。接合部はゆるやかにくびれ、脚部は内湾しながら「ハ」字状に開く。脚裾部内面には、粘土のはみ出しがみられる。口唇部外面は面取りされる。外面は縦方向に粗くヘラミガキされるが、口縁部と接合部にハケ目痕が残る。坏部内面は、横方向に粗くヘラミガキされる。脚部内面はヘラナデされた後、指でナデられている。口縁部内外面には、焼成時の黒斑がみられる。色調は外面が赤褐色（5YR5/6）、内面はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には少量の礫・粗砂・白色粒子を含む。北東床面上から、坏部を伏せたような状態で出土した。

甕形土器（6～15・17～20）

6は台付甕形土器。脚台部を欠損する。口径18.5cm・現存高22.8cmを測る。体部中位に最大径をもつ球状の体部から頸部でくびれて、口縁部は直立気味に外傾する器形である。口唇部外面には、右方向から棒状工具により押捺された刻みが巡る。内外面ヘラナデされるが、工具痕が残る。甕部外面上半と甕部内面底部には炭化物の付着がみられる。脚台部外面は斑点状の剥離が顕著である。色調は外面が明赤褐色（5YR5/6）、内面が橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・橙色粒子・白色粒子を含む。炉跡上床面レベルより出土。

7は甕部のみ残存する。口径9.3cm・現存高18cmを測る。体部中位に最大径をもつ。球形を呈する体部から立ち上がり、頸部で強くくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には、粗目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面はヘラナデされるが、外面には縦位、内面口縁部・体部下位には横位のハケ目痕が残る。色調は外面がにぶい赤褐色（5YR5/4）、内面が赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。炉跡上床面レベルからの出土。

8は甕部のみ残存。口径7.8cm・現存高18cmを測る。最大径を体部中位にもつ球状の体部から、頸部で屈曲し口縁部は外反する器形である。口唇部外面には粗目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と内面口縁部にはハケ目痕が残る。色調は外面が明赤褐色（5YR5/6）、内面は橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子・赤褐色粒子を含む。住居中央、床面から18cm浮いた状態で出土。

9は台付甕形土器の甕部下半から脚台部にかけて遺存している。裾部径11.5cm・現存高10.5cmを測る。

甕部下半は垂状を呈し、脚台部は僅かに内湾しながら開く器形である。甕部内外面はヘラナデされるが、外面には縦位の粗いハケ目痕が残る。脚台部は内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕、内面には工具痕が残る。北側コーナー壁際から、脚裾部を上にした状態で出土した。

10は台付甕形土器の脚台部の2/3のみ残存。裾部径12㎝・現存高8.5㎝を測る。裾部へかけて直線的に広がる器形である。脚裾端部には僅かに粘土のはみだしがみられる。内外面共にヘラナデされるが、外面と脚部下端には不規則なハケ目痕が残る。脚部内面上部には工具痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子・白色粒子を含む。1の壺の下、床面から9㎝浮いた状態で出土した。

13・14は台付甕形土器の口頸部破片。口唇部外面には、やや左方向から粗目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。13の色調は外面が灰褐色（7.5YR4/2）、内面はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・輝石・白色粒子を含む。10と同位置から出土した。14の色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には粗砂・輝石・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

15は肩部破片。14と同一個体か。内外面共にヘラナデされるが、外面には縦位のハケ目痕が残る。

17は体部上半の破片。内外面ヘラナデされるが、不規則なハケ目痕が残る。色調は外面が明赤褐色（2.5YR5/6）、内面はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。中央から南東寄りの床面から26㎝浮いた状態で出土。

18・19は体部下半の破片。内外面共にヘラナデされるが、不規則なハケ目痕が残る。色調は18がにぶい赤褐色（5YR5/4）、19が橙色（5YR6/6を）を呈する。いずれも胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。18は1の壺と同位置から出土した。19は中央からやや南東寄りの床面から15㎝浮いた状態で出土。

20は台付甕形土器の体部下半から接合部にかけての破片。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。19と同位置からの出土。

518号住居跡（第22図）

〔位置〕（C－3）G。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）370×320㎝。（主軸方位）N—50°—W。（壁高）11～19㎝を測り、70°前後の角度で立ち上がる。（床面）壁際及び炉跡周辺を除いてよく硬化している。住居東側には幅25～35㎝、高さ3㎝前後の凸堤が弧状に構築される。（炉跡）住居中央から北に偏って位置する。60×55㎝の楕円形を呈し、深さ8㎝を測る。中央部分は厚さ6㎝前後の粘土火皿で、赤化していて非常に硬い。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴になろう。凸堤にかかるピットは入口施設に関連しようか。（貯蔵穴）凸堤と壁の間に位置するのが通例であるが、本住居跡においては検出することができなかった。

〔覆土〕堆積状態が不整合で、ロームブロックを多く含むなど、埋め戻された可能性が大きい。東コーナー部に、小砂利を含む暗赤褐色土が堆積する。

1層　黒褐色土（10YR3/2）。ロームブロックを多く含む。硬質。

2層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。黒色粒子・赤色粒子を僅かに含む。硬質。

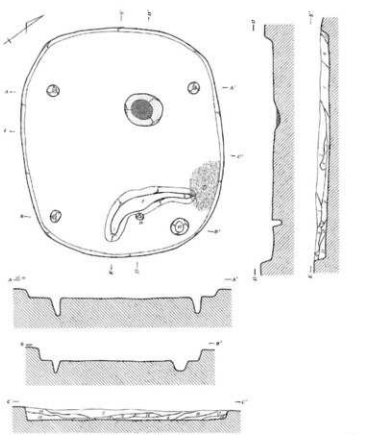
3層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム ブロック。硬質。
5層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。硬質。
6層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
7層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。黒色粒子を僅かに含む。やや硬質。
8層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。赤色粒子を僅かに含む。やや硬質。
9層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
10層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。
11層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
12層　黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
13層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
14層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
15層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。黒色粒子を僅かに含む。やや硬質。
16層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
17層　暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
18層　暗赤褐色土（5YR3/4）。ローム粒子・赤色粒子・小砂利を僅かに含む。やや硬質。

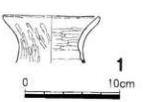
〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

518号住居跡出土遺物（第23図）



第22図　518号住居跡（1／60）



第23図　518号住居跡出土遺物（1／4）

壺形土器（1）

1は小形の口頸部破片。推定口径10.4cm。頸部はゆるやかにくびれて、口縁部は外反する器形である。外面は縦方向にヘラミガキされる。内面口縁部は横方向にヘラミガキされるが、以下ヘラナデされる。

全体に器面の荒れが激しく不明瞭。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈する。胎土には粗砂を少量、橙色粒子を多量に含む。床面上からの出土。

519号住居跡（第24図）

〔位置〕（C－4）G。

〔構造〕（平面形）隅丸正方形。（規模）270×265cm。（主軸方位）N－20°－W。（壁高）3～9cmを測り70°前後の角度で立ち上がる。（床面）住居中央に硬化面を残す。住居南側に幅40cm前後、高さ3cm前後の直線上の凸堤が構築される。（炉跡）住居中央から東に偏って位置する。55×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）住居南側にピットが1本検出された。入口施設に関係しようか。（貯蔵穴）凸堤と壁の間に存在するのが通例であるが、本住居跡では検出されなかった。

〔覆土〕

1層　黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

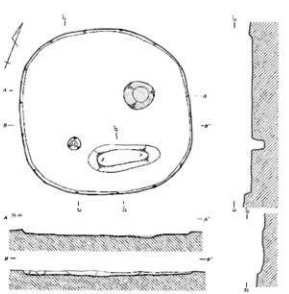
4層　黒褐色土（10YR3/2）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

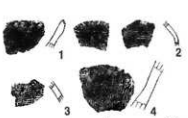
〔時期〕弥生時代後期後半～古墳時代前期前半。

519号住居跡出土遺物（第25図）

甕形土器（1～4）



第24図　519号住居跡（1／60）



第25図　519号住居跡出土遺物（1／3）

1は口頸部破片。口唇部外面には、棒状工具によりやや右側から押捺された刻みが巡る。外面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。内面は剥離が激しく不明瞭。色調は外面が灰褐色（7.5YR4/2）、内面は橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含む。

2・3は体部破片。2は内外面共にヘラナデされるが、外面縦位、内面横位のハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含む。3は内外面共にヘラナデされるが、外面にハケ目痕が残る。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含む。

4は台付甕形土器の甕部下半から接合部にかけての破片。内外面共にヘラナデされるが外面には縦位のハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中からの出土である。

520号住居跡（第26図）

〔位置〕（B－3）G。

〔構造〕住居跡の南及び西側は破壊されている。（平面形）隅丸長方形。（規模）推定350×300cm。（主軸方位）N－50°－W。（壁高）1～12cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）遺存している部分では、東コーナー部を除いて検出された。上幅10～16cm・下幅5cm前後、深さ1～4cmを測る。（床面）壁際及び炉の周辺を除き、硬化面を残す。（炉跡）住居中央から北西に偏って位置する。径50cmのほぼ円形を呈する地床炉で、深さ10cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）東側コーナー部に位置するピットが該当しよう。30×25cmの楕円形を呈し、深さ7cmを測る。

〔覆土〕堆積状態が不整合で、ロームブロックを含むなど、埋め戻された可能性がある。部分的に焼土の堆積が見られる。また、東コーナー部に小砂利を含む暗赤褐色土の堆積が見られる。

1層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

2層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

3層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。

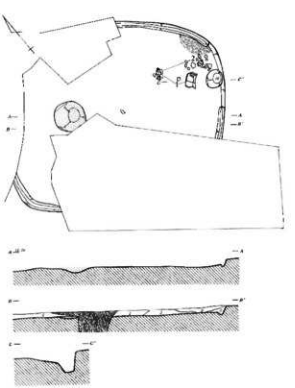
4層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

5層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

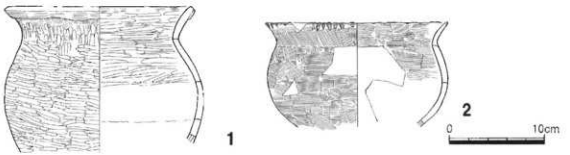
〔遺物〕多くはないが、貯蔵穴周辺にまとまる。床面上に、僅かではあるが炭化材が検出された。

〔時期〕古墳時代前期。

〔所見〕焼土・炭化材の存在から、焼失家屋の可能性がある。



第26図　520号住居跡（1／60）



第27図　520号住居跡出土遺物１（1／4）

520号住居跡出土遺物（第27・28図）

壺形土器（1）

1は広口壺。体部下半以下が輪積接合部で割れて欠損している。口径20cm・現存高16cmを測る。口縁部は折り返し口縁。頸部はゆるやかにくびれて、あまり張らない球状の体部に至る器形である。口縁部内外面はヨコナデされるが横位のハケ目痕が残る。頸部外面は縦方向にヘラミガキされるが、消しきれない縦位のハケ目痕が残る。頸部内面と体部上半は横方向にヘラミガキされるが、横位のハケ目痕が残る。体部下半は横方向にヘラナデされるが工具痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には粗砂・輝石を含むが、きめ細かく堅緻な作りである。東コーナー寄りの床面上からの出土。

第28図　520号住居跡出土遺物２（1／3）

鉢形土器（3）

3は折り返し口縁部破片。内外面共にヘラミガキが施されるが、口縁部外面には僅かにハケ目痕が残る。全面赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土である。

甕形土器（2・4・5）

2は甕部1/4程度が残存する。推定口径19cm・現存高11cmを測る。最大径は体部中位と口縁部で拮抗する。口唇部外面には櫛目の板の小口で刺突された刻みが巡る。体部あまり張らない球状を呈し、頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。色調は外面が橙色（5YR7/6）、内面が橙色（5YR6/8）を呈する。胎土には礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。東コーナー寄りの床面上からの出土。

4は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面には横位のハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子・輝石を含む。覆土中からの出土。

5は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面には縦位の粗いハケ目痕、内面下端には横位のハケ目痕が残る。外面は灰褐色（7.5YR4/2）、内面はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を多く含む。覆土中から出土した。

521号住居跡（第29図）

〔位置〕（B－3）G。

〔構造〕住居北西側は破壊されている。（平面形）隅丸長方形になろうか。（規模）不明×455cm。（主軸方向）N－56°－W。（壁高）8～15cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（床面）住居東側に一部

硬化面が観察されたが、全体に軟弱である。東コーナー部に幅25cm前後、長さ40cm、高さ2cm前後の小規模な凸堤が構築される。（炉跡）検出されなかった。破壊されている部分に位置するものと思われる。（柱穴）主柱穴は検出されなかった。大部分のピットは後世のものである。南東壁下中央のピットは入口施設に関係しようか。（貯蔵穴）南東壁下、北東に偏って位置する。45×35cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。

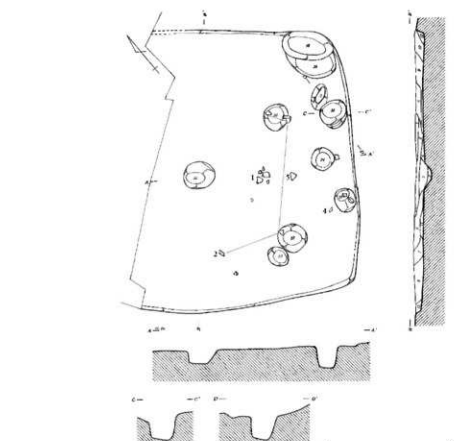
〔覆土〕堆積状態が不整合で、ローム粒子・ロームブロックを多く含むなど、埋め戻された可能性が大きい。

1層　耕作土。

2層　黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

3層　黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。炭化材小片を多く含む。やや軟質。

4層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を含む。



第29図　521号住居跡（1／60）

第30図　521号住居跡出土遺物1（1／4）

5層　黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・小ロームブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

6層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

7層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

8層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

9層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

10層　黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

11層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

12層　灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

13層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

521号住居跡出土遺物（第30・31図）

壺形土器（3）

3は複合口縁部破片。口縁部外面と口唇端部にはLRの単節縄文が施される。内面は横方向に丁寧にヘラミガキが施される。縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。赤彩部はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土は粗砂・白色粒子を少量含むが、きめ細かく精製されている。覆土中からの出土である。

高坏形土器（1）

1は坏部のみ遺存する。口径7.4cm・現存高7.4cm。坏部は大きく開き浅い椀状を呈する。接合部はくびれて脚部は比較的大きく広がるものと推測される。坏部内外面は縦方向にヘラミガキされるが、体部上半外面には僅かにハケ目痕が残る。脚部内面の天井部はヘラナデされる。全面赤彩されるが、器面の摩耗が激しく不明瞭。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子・輝石を含むが、きめ細かく堅緻である。住居南東、床面から4～7cm浮いた状態で出土。

甕形土器（2・4～6）

第31図　521号住居跡出土遺物2（1／3）

2は口縁部から体部上半1/2程度が遺存する。推定口径24.5cm。球状を呈すると推測される体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部内面は面取りされる。口唇部外面には、柾目の板の小口部分をやや深めに刺突した刻みが施される。口縁部内外面はヘラナデされるが、外面縦位、内面横位のハケ目痕が残る。体部内外面はヘラナデされるが、外面には粗く不規則なハケ目痕、内面には工具痕が明瞭に残る。外面には煤が付着する。色調は内外面ともににぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。中央付近から南東壁際に至る広い範囲にかけての、床面から3～11cm浮いた状態で出土。

4は口頸部破片。頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には、右方向から柾目の板の小口で浅く刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、不規則なハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/8）を呈する。胎土には粗砂・軽石粒子を含む。南東壁際ピット脇から出土した。

5は体部下半の破片。2と同一個体と思われる。内外面共にヘラナデされるが、外面には不規則なハケ目痕が残る。内面には工具痕がみられる。外面には炭化物の付着がみられる。

6は肩部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面が縦位、内面が横位の粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

第3章　概　括

（1）旧石器時代

旧石器時代の石器集中地点は2ヵ所調査され、出土層位を異にしていた。ここではそれぞれの石器集中地点について簡単にまとめてみる。

13号石器集中地点の石器の出土層位はⅣ層中位から下位に集中する傾向がみられ、礫のそれも概ね一致する。

石器にはナイフ形石器・石核・剥片・砕片があり、剥片・砕片の出土量の多さから石器製作場的な性格が考えられる。

出土した石器の母岩別の内訳は黒曜石4種・非黒曜石4種であるが、これらの中で大部分を占めるのは石核・剥片・砕片からなる黒曜石Bとした一群で、幅広・寸づまりの剥片を剥取する剥片剥離作業がみてとれる。

本石器集中地点の石器群は、出土層位及び石核・剥片の在りようから武蔵野Ⅱａ期に比定して大過ないものと思われる。

ナイフ形石器は端正な縦長剥片を素材として作られていて、他に出土している石核・剥片の形状とは合致しない。また、同母岩と思われる剥片等も検出されていない点を考えあわせると、製品として持ち込まれた可能性がある。あるいは、本石器の出土位置が石器集中部の外縁にあり、出土レベルも最上位にあることから、他の文化層の石器であることも考えられる。

14号石器集中地点の石器は石核・剥片・砕片からなるⅥ層上位に集中する。主要な遺物である剥片は縦長のものが主体を占め、特に石刃状のものは透明度の高い良質の黒曜石を使用している。武蔵野Ⅰｃ期に比定されよう。

（2）弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の土器について

本調査区からは7軒の住居跡が検出されたが、耕作などによる攪乱で遺存状態があまり良い状況ではなかった。遺物は517号住居跡でまとまった量の出土が見られたが、全体的に遺構数に比べて遺物の量も少量であった。その為今回は本格的な編年と考察は稿を改めることとし、本調査区出土の土器群について簡単にまとめることにする。なお、出土土器の名称に関しては、甕形土器→甕、壺形土器→壺、高坏形土器→高坏と省略して記述する。

今回出土した土器群には、東海地方西部に系譜を求められるものが出土している。中でも特異なのは、515号4の脚部に多条沈線文を有する山中式系統の高坏、517号3の甕壺，517号4と521号1の元屋敷系高坏である。他にも西原大塚遺跡第43地点において131号住居跡から菊川式系統の壺、256号住居跡から山中式系統の器台形土器など東海地方西部系の土器が多く出土している（宮川2001）。これらの土器群は、西原大塚遺跡における在地土器群との併行関係を明らかにすることができる良好な資料となっていて注目される。

515号4の高坏は残念ながら脚部のみ残存するもので詳細が不明であるが、脚部に横線文を有する事から山中様式に系譜を持つ器種であることが推測される。515号1の単口縁壺が体部中位に最大径をもち、頸部の屈曲が強いという特徴を示す事から、比田井氏編年の南関東古墳Ⅰ段階古相前半にとりあえ

ず比定してみる。2の壺も体部が球状であるが赤彩されていて、大体同じ古墳Ⅰ段階古相に位置するものと思われる。515号5の台付甕形土器は、出土状態から埋め戻された土と共に廃棄された可能性が高く、この遺物と当住居跡との直接的な関係は不明である。頸部の屈曲度が増し、体部が球状で張りが強い器形である事から時期は古墳Ⅰ段階古相に位置づけられよう。

517号4の高坏は木更津市高部古墳32号墳などに類例がみられるもので、従来の研究により赤塚氏編年の廻間Ⅰ－4～Ⅱ－1段階に位置づけられている（西原2002）。一方在地系土器群である、517号1の大形壺は網目状撚糸文を有するもので、志木市地域が属する東京湾岸北部地域では古墳Ⅰ段階古相に盛行するとされている（比田井2001）。2は体部が下膨れの形態を示すため、1の壺よりも古相を示す。3の甕壺と推定される壺は底部が凹む独特な形状を示し、体部最大径が中位に位置することから廻間5期に相当する（赤塚1990）。すなわち廻間Ⅱ式1段階に比定されよう。そして517号の台付甕の中で一番の新相を示す8の在地系台付甕も、頸部「く」字状屈曲化の進行がみられる事から、南関東古墳Ⅰ段階古相後半に比定される。6・7の台付甕は頸部のくびれが8よりもゆるやかである様子から8よりも古相を示し、南関東古墳Ⅰ段階古相前半に比定される。

520号1は当地域ではあまり出土例がない広口壺である。類例としては東松山市代正寺遺跡68号住居跡などがある。頸部の屈曲度が強いことと、共伴する520号2の台付甕は頸部屈曲度が強く、体部が球状でハケ目痕が不規則であることから南関東古墳Ⅰ段階新相に位置づけられよう。

521号1の元屋敷系高坏は「坏部の稜が不明瞭になり椀状を呈する点は廻間Ⅲ式後半の様相に類似する」（比田井2001）ことから南関東古墳Ⅱ段階に位置づけられるであろうか。2の台付甕は頸部が「く」字状に屈曲化、口唇部の刻みも形骸化してハケ目痕も不規則であることから1と同時期である可能性が高い。

以上、本調査区における出土土器について概観してきた。次に比較的出土遺物がまとまっていた、515・517・520・521号住居跡を中心にして時期的な変遷をみてゆくと、517→515→520・521号という順番になると考えられ、全体的には比田井氏編年の南関東古墳Ⅰ古～Ⅱ段階にほとんどの土器が該当するであろう。

今回の発掘調査は本遺跡の僅かな部分にすぎなかったが、在来の土器群に加えて濃尾平野、伊勢湾沿岸地域に系譜をもつ壺や高坏の出土をみるなど、注目すべき成果を上げることができた。地域間の何らかの交流を示す資料として重要であり、今後も検討を続けていきたいと思う。

〔引用・参考文献〕

赤塚次郎　1990『廻間遺跡』愛知県文化財センター

1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第40集

1993「山中式というデザイン」『考古学フォーラム』3

小倉　均　1990「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構について」『埼玉考古第27号』

尾形則敏　1990「第4章　西原大塚遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集

1991「第2章西原大塚遺跡第7地点の調査」志木市の文化財第15集

1999「第10章　西原大塚遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集

2000「第2章　西原大塚遺跡第37地点の調査」「第3章　西原大塚遺跡第39地点の調査」『志木市遺跡群10』志木市の文化財第28集

2003「第3章　西原大塚遺跡第54地点の調査」『志木市遺跡群13』志木市の文化財第35集

尾形則敏・深井恵子・青木　修　2004「第3章　西原大塚遺跡第65地点の調査」『志木市遺跡群14志木市の文化財第36集

加藤修二　1997「結節文についての一考察」『奈和』第35号

佐々木保俊　1985「第1章　西原大塚遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点　中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集

1989「第5章　西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集

1991「第2章　西原大塚遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第16集

1996「第2章　西原大塚遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集

1996「第4章　西原大塚遺跡第14地点の調査」「第11章　西原大塚遺跡第21地点の調査」志木市の文化財第24集

1997「第8章　西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集

2002「第3章　西原大塚遺跡第47地点の調査」『志木市遺跡群12』志木市の文化財第32集

佐々木保俊・尾形則敏　1987「第2章　西原大塚遺跡第4地点の調査」『新邸遺跡第2地点　西原大塚遺跡第4地点発掘調査』志木市遺跡調査会調査報告第3集

1990『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集

佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳　2001「第3章　西原大塚遺跡第43地点の調査」『志木市遺跡群』志木市の文化財第30集

2005『西原大塚遺跡第111地点』志木市遺跡調査会調査報告第8集

佐々木保俊・関根正明・上田　寛・内野美津江・宮川幸佳　2000『西原大塚遺跡第45地点の発掘調査報告書』志木市遺跡調査会・小松フォークリフト株式会社

鈴木孝之　1991『代正寺・大西』㈱埼玉県埋蔵文化財調査事業団

谷井　彪　1975「西原・大塚遺跡発掘調査報告」『志木市の文化財第4集』

西相模考古学研究会　2001『弥生後期のヒトの移動』西相模考古学研究会・六一書房

西原崇浩　2002『高部古墳群Ⅰ－前期古墳の調査』千束台遺跡群発掘調査報告書Ⅵ・木更津市教育委員会

比田井克人　2001『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版

宮川幸佳　2003「西原大塚遺跡における方形周溝墓出土土器」『埼玉考古』第38号

2004「志木市西原大塚遺跡出土の古墳時代前期後半の土器」『埼玉考古』第39号

報告書抄録

ふりがな	にしはらおおつかいせき　だい110ちてん　はっくつちょうさほうこくしょ		
書名	西原大塚遺跡第110地点発掘調査報告書		
副書名		巻次	
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告	巻次	第9集
編著者	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳		
編集機関	埼玉県志木市遺跡調査会		
所在地	〒353－0002　埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号　TEL 048（473）1111		
発行年月日	平成17年6月30日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
西原大塚遺跡第110地点	志木市幸町4丁目69街区3～6画地	11228	007	35° 49′ 9″	139° 33′ 57″	20050207 ～ 20050310	500㎡	集合住宅建設

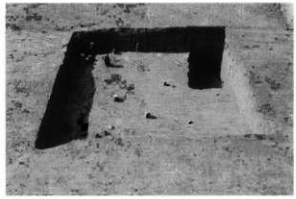
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
西原大塚遺跡第110地点	集落跡	旧石器時代 武蔵野台地Ⅳ層	石器集中地点	1ヶ所	ナイフ形石器 剥片・石核	
		旧石器時代 武蔵野台地Ⅵ層	石器集中地点	1ヶ所	剥片	
		縄文時代中期	土坑	1基	土器片	
			集石	1基		
		古墳時代前期	住居跡	7軒	壺形土器・甕形土器 高坏形土器・鉢形土器	

図　　版

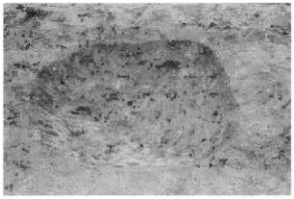
調査区近景

発掘調査風景

13号石器集中地点

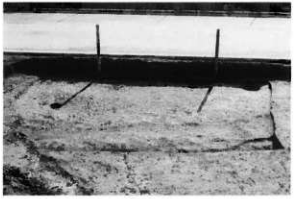


14号石器集中地点



495号土坑

24号集石



33号住居跡

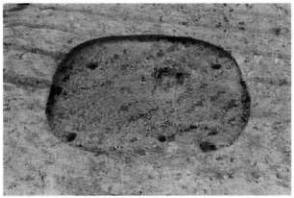
515号住居跡覆土堆積状態

515号住居跡遺物出土状態

515号住居跡

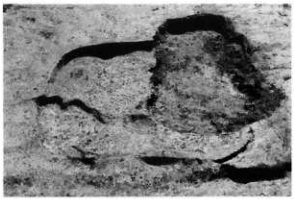
517号住居跡遺物出土状態

517号住居跡



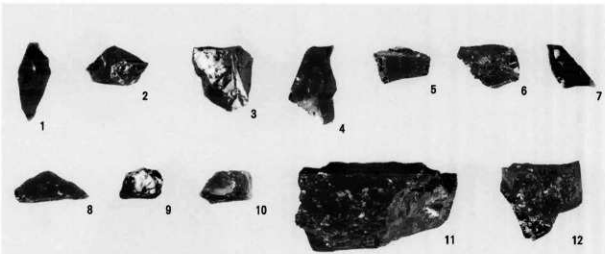
518号住居跡

519号住居跡

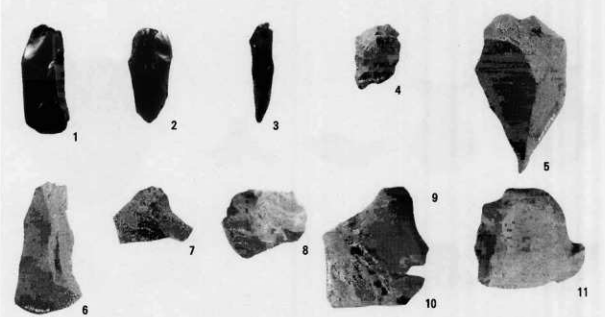


520号住居跡

521号住居跡

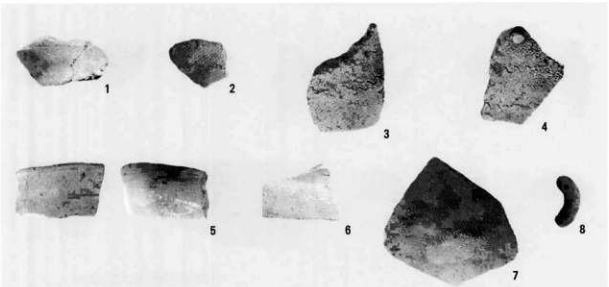


13号石器集中地点出土遺物

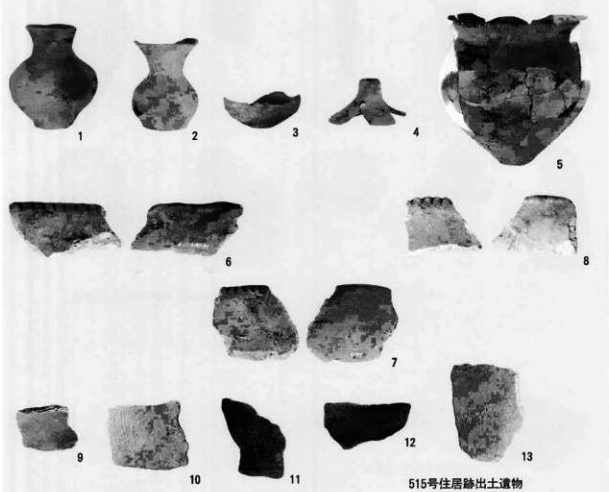


14号石器集中地点出土遺物

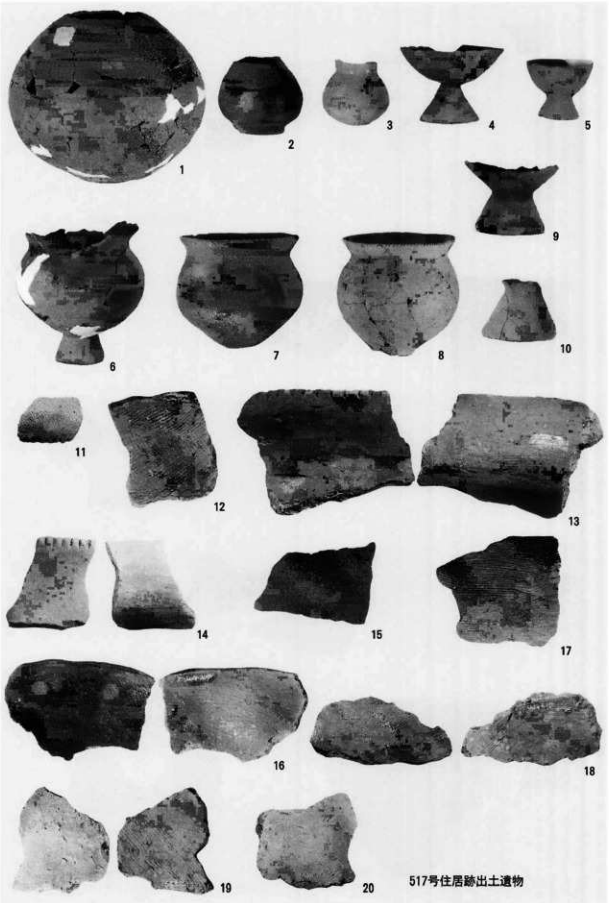
495号土坑出土遺物



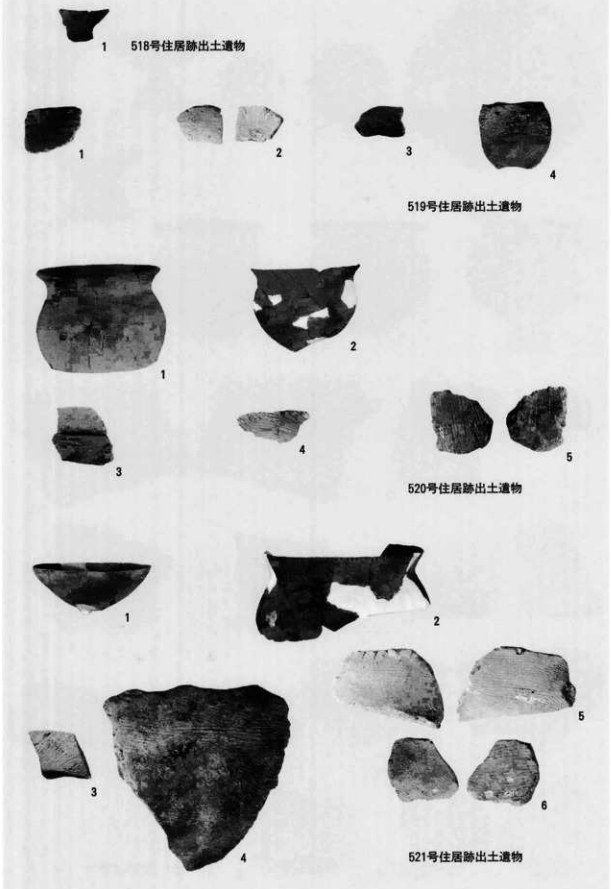
33号住居跡出土遺物



515号住居跡出土遺物



517号住居跡出土遺物


1
518号住居跡出土遺物
1
2
3
4
519号住居跡出土遺物
1
2
3
4
5
520号住居跡出土遺物
1
2
3
4
5
6
521号住居跡出土遺物

志木市遺跡調査会調査報告　第９集

西原大塚遺跡第110地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発行日　平成17年６月30日
印　刷　株式会社 白 峰 社